

# ラインの向こう側

## ～ 留置所体験記 その5 ～

茶ーリトル(ペンネーム)

### 前回のあらすじ

友達2人と服を盗み逮捕された。僕は20歳で、あとは未成年。僕だけ違う場所に連れて行かれ、留置場生活が始まった。

手錠にひもを通して繋がれた僕たちは、ワゴンバスに乗っけられて警察の留置場を出発した。他の警察署に寄りながら罪人を乗せ、総勢20名の罪人ご一行を乗せたワゴンバスは、東京地検の中へ入っていた。

他にも何台かワゴンバスが停められていて、そこから僕らみたいに手錠にひもを通された仲間達が次々に出てきた。それで、なんか奥にある階段へと一路連れてかれて、みんな下っていくのが見えた。

なんかさ、もう二度と上がってくる事ないんじゃないか、って思えるくらい空気がどんよりしてるんだよね。別に、死刑台に向かっている訳じゃない事ぐらい頭では分かってるんだけどさ。こんななら、首にも鎖か縄をかけてもらいたいよ、ホント。たぶんそっちの方がフィットするね、絵的に。

それで遂に、我等が高井戸部隊も地下へと下っていった。そして、地下から東京地検の建物に入ると、どんどん奥へ導かれ、薄暗いなが～い廊下にてた。そこでストップ。そして、支部ごとに奥の部屋へ通されてった。部屋の奥に檻部屋が5、6個かな？ まあ、そのぐらいあって、その中には長イスが2つ向き合って並んでた。

僕らは、僕を含めた全員が検事さんとの接見が終るまで、この長椅子にず～～つと座ってなきゃいけないんだ。ちなみに午前中中頃から夕方ぐらいまで、時間にして、そ～だな～、7時間ぐらい手錠をはめたまま、じいいとね。これは正直辛かったね。もちろんノー・トーキング！ 昼ごはんは支給されて、この時だけ手錠はずされるんだけど、あとはずっと手錠つけたまま。

それで、便所！ これが真横にあって下半身部分だけ隠れる様になっていて、後は大公開！ おっぴろげ！ いやん！ つつっても顔が丸出しなぐらいだけどね。ただ、刑務所とかになればこんなの当たり前

なんだろうけどさ、こっち側の世界にこない限りない訳じゃん？ こんな事。大便している時の顔なんて他人には見られたくないじゃん！ まあラッキーな事にこの日、地検にいる間は僕のお腹の波は荒れる事はなかった。よかった。

1つの檻に15人ぐらいの人が収容されていて、1つの檻に1人ずつのペースでお巡りさんに呼ばれて外へと出て行った。検事さんのところへ行くんだよ。僕はなかなか呼ばれなかったから、待ち時間がけっこう長かった。

もちろん不安な気持ちごとれた訳じゃない。不安で不安で泣きそうになったよ。形のない恐怖がどこからともなくやってきて、胸の太鼓を小刻みに叩く。そして、それが前身に響き渡ると、もう目をつぶってそれに堪えるのが精一杯だった。無機的な浅い睡眠をとるのが、それから避ける唯一の方法だった。

ようやく僕の名前が呼ばれた。檻の外へ出ると、隣にある別の部屋に連れていかれた。で、よく見ると、奥の方に検事さんらしきスーツを着た人が、机の上のメモをとりながら椅子に座っていた。それでその前に、先に名前を呼ばれた人達が立って並んでいて、僕もその最後尾に並ばされた。

やがて待つこと10分ぐらい、ついに検事さんの前の椅子に僕は着席した。そして、検事さんの口が開く。

つづく・・・